

2025年12月7日

アドベント第2週礼拝説教要約

聖所で神をほめたたえよ

(詩篇150・1～6)

一、詩篇150篇をめぐって

第150篇は、詩篇を締め括る詩篇です。詩篇には、詩篇を編集した人がいました。だれであるのかは分かりません。少なくとも、第二神殿時代です。と言いますのは、3節より5節に〈角笛を吹き鳴らして 神をほめたたえよ……〉とあるからです。楽器を用いて主をほめたたえるのは、第二神殿時代の礼拝のスタイルです。第150篇が詩篇を締め括る詩篇であるなら、詩篇という五巻から成る詩篇には、始まりとなる、あるいは表紙となる詩篇を置いたはずです。それが第1篇と第2篇です。詩篇が150篇になる前は、第2篇が始めに置かれていたとする説もあります。詩篇が150篇になった時に、第1篇を最初に置いたとする説です。第1篇は、律法(トーラー)の大切さを歌う詩篇です。第2篇は、主に油を注がれた王(メシア)を賛える内容です。第1篇、第2篇が「表紙」であったとするなら、詩篇の本文は第3篇から始まることになります。第3篇以降は「ダビデの祈り」が置かれています。こうして「ダビデの祈り」は第72篇まで続き、72篇の終わりに「エッサイの子ダビデの祈りは終わった」とい

うことばがあり、第一巻が終わります。73篇から第三巻が始まります。第三巻は、アサフの祈りと賛歌が収められ、第90篇から第四巻が始まりますが、徐々にその基調は賛美が多くなり、第107篇以降の第五巻は、ほとんどが賛美です。ということとは、詩篇の最終的な編集者は「詩篇は、祈りから始まり、賛美に終わる」という考えを持って、編集したことが分かります。これはそのまま、私共の信仰生活に当てはまります。信仰生活には苦しいこともたくさんありますが、最終的には賛美で終わりますので、そのように受け止めてください。

二、第150篇に聞く

1節を見てまいります。〈ハレルヤ。神の聖所で 神をほめたたえよ。御力の大空で 神をほめたたえよ。〉1行目の〈ハレルヤ〉は、146篇から続く「ハレルヤ」という出だしのことばですが、意味は「主をほめたたえよ」です。2行目、3行目に〈神の聖所で 神をほめたたえよ。御力の大空で 神をほめたたえよ。〉とあります。〈神の聖所〉は、主がモーセに幕屋を造るように指示された時から、始まります。祭司たちが、お務めをする場所です。聖所の奥には至聖所という、もっとも聖なる部屋があります。至聖所と聖所は垂れ幕で仕切られていました。この形は、紀元70年に、ユダヤ戦争により、ローマ軍によって

破壊されるまで続きました。〈神の聖所〉を私共に適用するなら、何に当てはまるでしょうか。一つは、キリストを信じる私共一人ひとりです(1コリント3・16)。もう一つは、キリストの名によって集まる所、すなわち教会です(マタイ18・20)。私はもう一つ加えて構わないと思います。それは、礼拝堂です。礼拝堂は神に礼拝を献げるための場所です。〈神の聖所で 神をほめたたえよ〉は、教会という、主イエス・キリストによって呼び集められた集会において、神をほめたたえることです。では、3行目の〈御力の大空で 神をほめたたえよ〉は、どのように理解したら良いのでしょうか。「大空」は元々、聖なる神の御住まいと考えられていた場所です。紀元前2世紀くらいから、大空には悪魔も暗躍していると受け止められるようになり、エペソ書6章のような聖句も出てまいりましたが、元々は神の御住まいです。詩篇68篇に〈力を神に帰せよ。威光はイスラエルの上に 御力は雲の中にある。〉とあります。

こうして、主をほめたたえることばは続いて行きます。2節です。〈その大能のみわざのゆえに 神をほめたたえよ。その比類なき偉大さにふさわしく 神をほめたたえよ。〉と。

3節より5節を見てまいります。〈角笛を吹き鳴らして 神をほめたたえよ。琴と豎琴に合わせて 神をほめたたえよ。タンバリンと踊りをもって 神をほめたたえよ。弦をかき鳴らし笛を吹いて 神をほめたたえよ。音の高いシンバルで 神をほめたたえよ。鳴り響くシンバルで 神をほめたたえよ。〉とあります。何やらとてもにぎやかな礼拝と言いまじうか、騒がしい礼拝にも見えます。それは、主をほめたたえることの表現ですから。様々であってかまわないと思います。詩篇62篇のように〈私のたましいは黙ってただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。〉という祈りもあります。そういうわけで、詩篇150篇に書かれているからと言って、そのまま真似をするのは、知恵のないことです。

最後に6節です。〈息のあるものはみな 主をほめたたえよ。ハレルヤ。〉とあります。〈息のあるもの〉とは、主が造られたいのちのある生き物です。

三、私たちにできること

私共が神にできることは何でしょうか。それは、主をほめたたえることです。詩篇51篇にも書かれています。〈まことに私がお供えてもあなたはいけにえを喜ばれず 全焼のささげ物を望まれません。神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ 砕かれた心。神よ あなたはそれを蔑まれません。〉と。主から柔らかい心をいただいて、主をほめたたえる者とされようではありませんか。